

スポーツにおける差別的な行為に関する研究

スポーツ社会学ゼミナール 1215145 馬場 裕大

1. 研究動機・研究目的

近年、外国籍のアスリートや混血のアスリートが活躍する場が増えてきているが、それと同時に差別的な行為や発言も増えてきている。2018年1月に行われた卓球の全日本選手権を制した張本智和選手についてインターネット上では「中国人だから強い」などの書き込みが多くみられた。また、大相撲におけるモンゴル力士に対する差別的な行為や、Jリーグの試合における外国人差別を意味する行為が後を絶たない。さらに、インターネットやSNSが普及してきた近年は、直接的な行為だけではなく特定の人物への批判や差別的な発言がインターネット上に書かれることも数多くある。外国籍のアスリートが活躍する場が増えていることや、混血のアスリートが多くなってきていることに対する賛否は様々だが、差別的な行為は存在していいものではない。

これらの経緯から、本研究では、インターネット上のコメント等を含む、差別的な行為がなぜ無くならないのか、その背景には何があるのかを明らかにし、外国籍のアスリートや混血のアスリートが活躍するのが当たり前となりつつある今の時代に、在るべき姿はどのようなものなのかをさまざまな視点から検討する。

2. 研究方法

本研究ではスポーツにおける差別的な行為の事例や先行研究から差別的な行為が起こる原因についての仮説を立て、その仮説について調査を行い、差別的な行為の対象となりやすいアスリートの特徴を分析する。その結果を踏まえて、日本において差別的な行為がなくなる原因は何かを考察する。また、本研究を今後どのように生かしていくかを考察する。

3. 主な結果と考察

<主な結果>

アスリートが差別的な行為の対象となりやすい条件として以下のものが挙げられる。

- ① 世界レベルの実績を残している（選手個人の知名度が高い）
- ② 見た目や名前といった外見的な部分から混血のアスリートだと判断できる

大坂なおみ選手やペイカー茉秋選手、ケンブリッジ飛鳥選手などはこの双方に当てはまり、ウェブ上では差別的なコメントが書かれることが多くある。①の世界レベルの実績を残していることは、その選手の知名度が高いことを示しており、競技そのものの知名度が直接影響しているというわけではない。②の見た目は肌や髪の毛の色などのアスリート自身の外見的な部分を指し、名前はカタカナや帰化を連想させる「金」や「張」が含まれていることを指す。

これらのことから、日本人は見た目や名前の外見的な特徴からそのアスリートが日本人か否かを判断し、その中で世界レベルの実績を残したアスリートに対して差別的な行為やウェブ上での差別的なコメントに至っていると言うことができる。

<考察>

このように、本研究では、日本人が何を基準にしてアスリートを「外国人」として捉え、差別的な行為に至るのかを考察したが、外国人に対する差別的な行為はスポーツの世界に限らず、様々な世界に存在する。そのことを今後にどのように生かすかを教育の視点から考える。

近年、日本の教育現場ではいじめに関する話題が尽きない。いじめの内容として多いのが、「仲間はずれにされる」「悪口を言われる」といったことである。日本の学校に通う外国籍の児童生徒のうち、日本語指導が必要な生徒はなかなか自分の言いたいことが通じず仲間外れにされるということが多くある。さらに、携帯電話を所有する児童生徒が増えている現代では SNS によるいじめも存在している。外国人労働者の受け入れ拡大によって在留外国人が増加の傾向にある現代の日本において、この問題は避けては通れない道としてしっかりと向き合わなければならない。

在留外国人が自分の子どもを日本の学校に通わせる際に期待していることの一つとして、子どもに高等教育を受けさせ、日本の企業に就職させたいということが挙げられる。それ故に子どもの教育環境や学校の文化の違いに悩むことが数多くある。しかし、それらについて悩んでいるということは日本の文化に馴染もうと努力をしている証でもある。日本人が異国の地で生活をしようとして苦勞するのと同様に外国人も日本で悪戦苦闘しているのである。私たち日本人はこのような事実を受け止め、グローバルな社会を作り上げていくことが大切だと私は考える。

4. 結論

日本人は、ある特定の人物に対して外見的な特徴から「日本人」かそうでないかを判断する。その外見的な特徴とは見た目（肌の色や体格など）と名前（カタカナや「張」「金」などが含まれる）が主である。これらの要素から差別的な行為やコメントが生まれるものと考えられる。また、スポーツの世界に目を向ければ、オリンピックにおいてメダルを獲得する程度の実績を残したアスリートが差別的な行為の対象となりやすい。さらに、メディアがそのアスリートをどのように扱うかも非常に重要であり、日本人として扱うのか、少し違うことを暗に示すのかによって世間からのそのアスリートに対する視線が大きく変わっていくのである。

5. 卒業論文の執筆を終えて

本研究では日本のスポーツ界において、なぜ差別的な行為が起きてしまうのかを仮説を立てて考えたが、本研究によって明らかになったことだけが原因で差別的な行為が起きているとは言い切れない。さらに、世界には差別的な行為が日常茶飯事だという国や地域もあり、外国に関する調査もより徹底して行わなければ日本が置かれている立場や今後、どのような方向に進んでいくべきなのかは検討することができない。2019年にはラグビーワールドカップ、2020年には東京オリンピック・パラリンピックが開催され、よりスポーツを通じてグローバル化が進んでいくことが考えられる。そんな時代だからこそ一人一人が外国人とどのように向き合うべきなのかをしっかりと考える必要があるのではないだろうか。